



至福のお母さんの野菜もてなし料理

金丸弘美
食総合ワロデューサー

新潟県加茂市は、東京から長岡経由で約2時間30分。その農家、かやもり農園の萱森教之さんと一緒に呼ばれたのが、新潟経営大学のオープン講座「地域と観光」のゲスト講師。

地域の農業と観光の連携をテーマに話すこととなつて、「講義が終わったら家に来ない？」と萱森さんに誘われて実家にうかがつた。なんと80年前の家を改装して、もてなしの場となつている。天井が高く太い梁がある。囲炉裏の部屋と広い畳敷きの居間がある。もともとは稲作の倉庫にしていたのだそうで、それを多くの人を招いての広間にしたのだそう。

萱森さんは11代目の稲作農家。家族と一緒に農業を営んでいる。17ヘクタールある。ハウスで育苗し田植えをしたあと、野菜を栽培している。玉ねぎ、大根、ホウレンソウ、枝豆、イチジク、パッションフルーツ、オクラ、ナス、ネギ、ニンジン、ジャガイモなどなど。これらが、お母さんの手料理で囲炉裏のテーブルに次々と登場するのだ。お母さんが、「すいませんね。野菜ばっかりで、こんなもんしかだせません」と言うのだが、これが半端ではない。自家製の野菜だから味わいが深い。贅沢の極みだ。

そうしてしばらくすると、萱森さん自身が、炊き立てのご飯でおにぎりを作り披露をする。

おわん型のおにぎりに小さい梅干しがちよんと載っている。梅干しとごはんのバランスが絶妙。口のなかに、ふんわり秋いつばいの香りをたたえた、つぶつぶがひろがっていくよう。

家も素敵だし、料理が素晴らしい。

「ここで、農家民泊をして、泊まつて食べるということをしたら、最高だね」というと、「こんな田舎に人が来るわけじゃないでしょう」と萱森さん。

「いやいや、山形、長野、高知、大分、長崎、奄美諸島も農家民泊があつて、今は、都会にないものを求めて観光に来る人がたくさんいる。国も支援事業をしている。ヨーロッパでは農村観光は主流だから。東京だつて民家や倉庫を改装したゲストハウスが増えていて、外国人客もたくさん来ている」と話した。



広間に並んだお母さんの野菜料理



萱森さんの米は、直接、消費者に販売をしている。東京にちよくちよく出かけては、おにぎりのイベントをしたり、餅つきを集めたりしている。東京に売れるのもいいけど、萱森さんのところに来てもらい、そこで、食事をしてもらったほうが、多くの人に共感と感銘を与えるだろう。

そんな話をしたあと、実際の東京のゲストハウスを見に行ったり、そのあと表参道の餅つきイベントで会ったりしていたら、農家宿泊をやってみようかと思うようになって、目下準備中だという。今年の7月1日に再び、新潟経営大学の特別講座にゲスト講師に呼ばれた。萱森さんから、講義のあとに寄つてよというので、大学に来てくれた知り合いの女性4名を連れて、再び、かやもり農園に伺った。

前回来た時とは季節が変わり、田植えをした田園風景が広がっている。そこに萱森家の瓦屋根の家がどんとある。その景色だけで、誘つた女性から「素敵！」とため息もれた。

招かれての懇親会。そこに萱森さんの仲間がお酒を持参で現れる。

やがて、お母さんの料理が次々と登場する。ヨーグルトにパッションフルーツ。ズッキーニとキュウリの糠漬^{ぬか}け、キュウリの酢の物、コリンキーとモロッコインゲンの揚げ物、

枝豆、三条車麩^かの煮物、ゴボウとニンジンのきんぴら、ぎんなん豆、ホウレンソウの胡麻和え、キュウリのニンニク和え、冷やしトマトの甘酢漬^{あまじく}け、トマトソーメン、アイスプラントと野菜と茹でた鶏肉のサラダ。

またまた、お母さんの「すいませんね。野菜はつかりで」がでた。野菜大歓迎。採れたて野菜の料理。こんな贅沢な料理、普段まず食べることができない。料理が大広間のテーブルに大皿でいくつも並ぶ。一緒に来た女性からとても喜ばれ「こんな機会でもないよ、出会えないね」と感謝された。「ここに泊まって、お母さんの野菜料理を食べることを提案したんだ」と言うと、「絶対にいい」と共感の声がテンション高くあがった。

実は、萱森さんと最初に出会ったのはひよんなことから。きっかけは、義姉・大ぞの千恵子の知り合いの歌手中尾ミエさんからだった。

萱森さんが、たまたま夫妻でテレビを見ていたら中尾ミエさんが唄っていたのだそう。その場面があまりに素敵で感銘し、思わず「こんな人と結婚したい」と、つぶやいたのだという。萱森さんは、東京のある集いで、中尾ミエさんを絶賛し、会ってみたいと話したところ、知っているという人がいて、仲介をするということとなった。

ところが、「知らない人と会うのは気をつけな」と。まずは面接をしてから」と言つたのは義姉・大ぞの千恵子。そんなことで、まず、私の義姉が萱森さんと面接、そして、無事に萱森さんは中尾ミエさんとご対面となつたのだとか。そこから中尾ミエさんと義姉は、何度か、萱森家の農家ツアーを体験していたのだった。こうして、中尾ミエさんと義親会から私は萱森さんと知り合いとなつたというわけ。そこから大学の講義で再会するなんて、縁は不思議。